

橋本病の起源をたどって

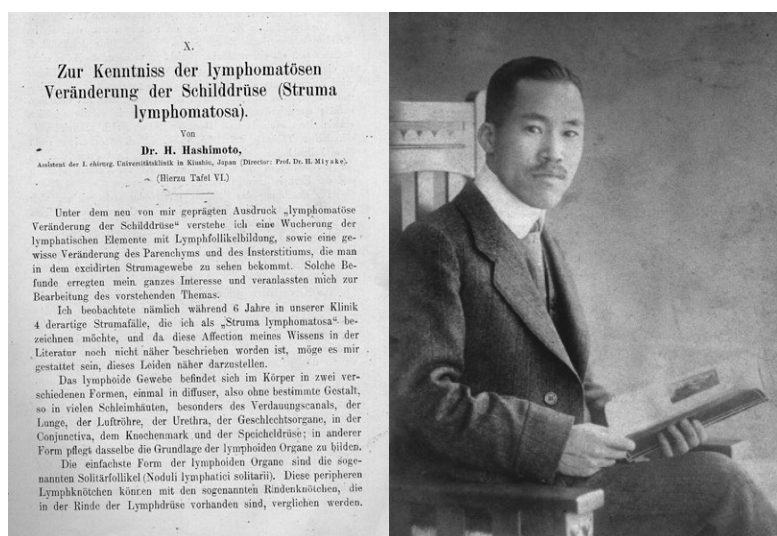
執筆者

山内 一郎

京都大学大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学

橋本策先生は、1881年に現在の三重県伊賀市で代々医業を継ぐ橋本家の五代目として生まれ、1907年に京都帝国大学福岡医科大学を第1回生として卒業された。翌1908年に外科第一講座に入局し、同教室に保存されていた甲状腺摘出標本の中から、4例の特異な病理組織を見出された。そして、わずか4年後の1912年に、「Struma lymphomatosa」として論文報告された(Archiv für klinische Chirurgie. 1912; 97: 219-248)。この論文には正確な病理組織所見と精緻なスケッチが添えられており、1931年のGrahamらの論文(Archives of Surgery. 1931; 22: 548-567)において、Struma lymphomatosaが当時慢性甲状腺炎の代名詞とされていたRiedel's thyroiditisとは異なる疾患であることが明記されるに至ったと考えられる。またこの論文のタイトルには初めて「Struma lymphomatosa (Hashimoto)」と橋本先生の名前が記され、1939年にJollによる論文(British Journal of Surgery. 1939; 27: 351-389)で、「Hashimoto's disease」という疾患名が使用された。こうして、橋本先生の業績と「橋本病」の概念は、欧米から本邦へと逆輸入されるかたちで広く認知されていった。

橋本先生は1912年の論文発表と同年にゲッティンゲン大学(ドイツ)へ留学され、帰国後は実家の医業を継ぎ、1916年に橋本病院を開業された。資料を紐解くと、往診に加えて週3回の手術を行い、県外からも多くの患者が治療を求めて訪れるなど、地域における外科医療の中心的存在であったと伝えられている。1934年、往診先で腸チフスに感染し、「Hashimoto's disease」の記載を見ることなく永眠された。しかし、研究における観察眼、論文執筆から海外留学に至るまでの揺るぎない使命感、医は仁術を体現されたお人柄は、まさに次の100年にも引き継がれるべき偉業である。



1912年に発表された論文と留学中の橋本策先生